

識別番号	K 3
研究課題	アメリカと大西洋世界：アメリカ像の環大西洋的構築を目指して
研究代表者	増井志津代（アメリカ・カナダ研究所・文学部英文学科）
共同研究者	大塚寿郎（文学部英文学科）、小塩和人（外国語学部英語学科）、上山隆大（経済学部経済学科）、永井敦子（文学部フランス文学科）、小川公代（外国語学部英語学科）
Summary	This project seeks to examine how religion, art, sports, political ideas and commercial culture were altered and received as people, things, and information traveled between the two sides of the Atlantic (and the Pacific) from the seventeenth century to the present. By placing “America” in the Atlantic context, this project will explore new possibilities for American studies.

1. 本研究の目的及び背景

本研究はアメリカ合衆国の社会、文化、歴史に環大西洋的観点から多角的にアプローチし、新たなアメリカ像を模索することを目的とする。

20世紀中期「アメリカ研究」は、第二次世界大戦後のアメリカが覇権国家としてのアイデンティティを模索する中、国家プロジェクトとして開始した。その原点は、ピューリタニズム研究者として現在もなおその影響力を保持しているペリー・ミラーに遡る。ミラーは、新大陸アメリカの「荒野」に進出し、聖書共同体の建設を目指したピューリタンの歴史にアメリカの国家創世へとつながる歴史的原点を見出した。ミラーの影響を受けたアメリカ研究者「神話象徴学者」に含まれるヘンリー・ナッシュ・スミス、R.W.B. ルイス、レオ・マルクス等草創期のアメリカ研究者に共通するのはアメリカを無垢な処女地、新しいエデンとしてとらえる神話的アメリカ観である。

このような思想史家を中心にした白人男性中心的視点による初期のアメリカ研究は1960年代から70年代以降の社会史や女性学の興隆によって批判され、さらに1980年代から90年代にかけての文学におけるポスト・モダン批評の流行、キャノンの見直し、人種、エスニシティ、ジェンダー、階級への注目によりアメリカ研究の細分化が進むこととなった。特に、近年の多文化主義の流行は、それまで顧みられることのなかった社会的マイノリティの視点を取り入れることによりアメリカとアメリカ人を多様なものとしてとらえることを可能にした。しかし、同時に各文化・民族グループの平等性、等価値性を極度に強調するため、包括的アメリカ像を次第につかみにくいものにする面があった。

視点を国外に移すと、アメリカの国家像はその一国主義的イメージにおいて国内のアメリカ研究者が理解するほど変化しているわけではない。いまだに外交、軍事、経済における世界覇権をめざし続けるアメリカの姿勢は、今日においても殆ど変化していないのが現実である。アメリカ国内の研究者により否定された神話象徴学派的アメリカ像は21世紀の今日においても、実は、いまだに機能しているのである。アメリカ研究者エイミー・カプランは、ミラー以降のアメリカ研究は、アメリカの帝国主義的伸張をヨーロッパ（特に英国）の帝国主義との関連の中でとらえる視点を曖昧にし続けたために、その一国主義批判が遅れたとするが、アメリカ研究者が一国中心的かつ微視的研究を脱していない状況は現在もなお続いている。こうした傾向を打破するには、アメリカをより広い周辺地域との交

流の文脈の中で相対的、かつ超域的にとらえる研究が必要となる。

本研究では、こうしたアメリカ国内外における「アメリカ研究」の状況を顧みつつ、大西洋を中心とした交流史を基軸として相対的観点からアメリカをとらえ直す作業を行う。ここで導入するのは、環大西洋研究のパースペクティブであり、植民地時代より今日までアメリカが大西洋の中でどのように位置づけられ、またどのような役割を果たしてきたのか、地域の文化、思想、経済交流関係から浮かびあがるアメリカ像を超領域的な共同研究体制をとることによって多角的に模索する。研究分担者はそれぞれの分担を踏まえ個別研究を進めた上で、環大西洋交流の中で「アメリカ」を経て醸成された様々な文化的特性がまた環大西洋世界にどのように還元されていくかを追求することを共通軸とする共同研究を行っていく。

初期段階においては、国内研究者による共同研究とするが、一定の研究基盤を築いたところで、国際的研究体制を取ることを予定しており、大西洋／太平洋的観点からのアメリカ研究を進めている海外研究協力者による講演やセミナーをアメリカ・カナダ研究所で企画し、今後環太平洋的視点からの研究へも展開することを目指している。

2. 研究計画・方法と共同研究者の役割分担

研究分担者による個別テーマは各自の専門性を尊重するもので、17世紀から21世紀までの文学、思想、経済、スポーツ、大衆文化に広がる。増井志津代は全体の研究統括と共に、将来国際研究とするための国外研究者との交流・調整を担当し、分担研究としては、宗教と印刷文化に焦点を置き、初期アメリカにおける宗教移民グループと母国との交流ネットワークにおける思想的影響関係をカルヴァン派の環大西洋宗教ディアスポラに着目しつつ探る。大塚寿郎はアメリカ文学思想研究を担当し、19世紀アメリカン・ルネサンス期から世紀転換期にかけてのアメリカにおけるCosmopolitanismの言説の形成と変容に着目し、環大西洋の人、もの、思想の交流がこれにどのように影響したかを検証する。上山隆大は、19世紀アメリカにおけるTherapeutic Cultureがヨーロッパの都市文化にどのような影響を与えたのか、特に消費文化とマーケットの関係に着目しつつ環大西洋交流史を検証する。小塩和人は19世紀を中心に、ヨーロッパのフットボールがアメリカで変容した過程を分析する。さらに、アメリカ化したスポーツが日本を含める諸国でどのように受容されたのかを考察することで、環大西洋／太平洋における文化の越境を思索する。永井敦子は20世紀、実存主義作家やシュルレアリストたちなど、フランス人、または両大戦間にフランスで活動した作家、芸術家たちの第二次世界大戦期の渡米経験が、戦後の彼らの創作や、彼らの作品のアメリカでの受容にどのような影響を及ぼしたかを探る。小川公代はヨーロッパ映画とアメリカ映画における「身体」、「ジェンダー」、「情動」の表象を分析することにより、環大西洋におけるフェミニズム思想（文学作品、映画論を含む）がどのような影響を及ぼしたかを検証する。

2011年度は、各自それぞれ国内外における調査を進め、図書等必要資料を収集しながら、個別研究を行う。全体の調整をはかるため、研究拠点をアメリカ・カナダ研究所に置き、研究の進捗状況の中間報告会を開催する計画である。